

よりよい自分をつくっていくためにⅢ

「学びの実感」を積み重ねることを通して、
どの子どもにも「確かな学力」を育む



静岡県教育委員会

はじめに

一般に、「授業は子どもを教える場だ」と考えられている。しかし、わたしは、あえて、「授業は子どもをさぐる場だ」と自分に言い聞かせている。わたしも、子どもに対して教えたいし、教えなければならないと思う。しかし、「教えるとはどういうことか」と自問していくとき、「真に教える」ということは、「子どもをさぐることのなかにしか成立しない」ということが、身にしみてわかってくるのである。

(長岡文雄著「子どもをとらえる構え」黎明書房)

授業づくりを考えると、私は、常に子ども不在の指導論とならないよう、「子どもをとらえる構え」に立ち戻るようにしています。

ある栽培農家から聞いた話ですが、果物を栽培するときは植物自身が自らをコントロールして成長できるように、敢えて水や肥料を与えない時期をつくるそうです。そうすると、かえって糖度が高く、美味しい果物ができると聞いて感心したことがあります。

また、その話を聞いて授業も同様だと思いました。

教師は、子どもたちに力を付けようと様々な手だてを用意し、また、それを全て使って充実した指導をしようと考えます。しかし、大切なのは、目の前にいる子どもを丁寧に見取り、適切な場面で、適切な手だてを講じることです。必要以上に手を掛けないことが、子どもの主体的な学びの姿勢を育み、「生きる力」につながります。

これまで静岡県では、子どもの主体的な学びの姿勢を育むために「学びの実感」を積み重ねることを、『よりよい自分をつくっていくために（平成21年3月発行）』『よりよい自分をつくっていくためにⅡ（平成23年3月発行）』を通して示してきました。

そして今回、『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』では、学習指導要領や児童生徒の学習評価の在り方、静岡県教育振興基本計画等を踏まえ、「学びの実感」を積み重ねることを通して、主体的な学びの姿勢を育むとともに、どの子どもにも「確かな学力」を育むことを全体イメージとして示しました。個々の教師が、思いや考えを共有し、学校体制で取り組めるよう、「子どもの学びを支える教師の役割」と「教師の授業づくりを支える学校体制」を示しました。また、生き生きとした子どもの学びの姿を通して学びの系統性も理解できるよう、幼、小、中、高校、特別支援学校の24事例を掲載しました。

教師の年齢構成は今後10年間で大きく変わっていきます。本冊子を活用することを通して、「生涯学習」と「子ども中心主義」の理念に基づく「子どもの学び」を大切にしたい授業づくりを若い世代へ引き継ぐとともに、学校全体で取り組んでいただくことを期待しています。

平成25年3月

静岡県教育委員会事務局参事兼学校教育課長
田 中 潤

目次

第1部 静岡県の教育	1
1 静岡県の教育の現状と今後求められる教育	1
2 静岡県が目指す教育	2
(1) どの子どもにも「確かな学力」を育む	
(2) イメージ図について	
3 「学びの実感」を積み重ねる子どもの姿	4
(1) 「学びの実感」を積み重ねる	
(2) 「学びの実感」を積み重ねることと自尊感情	
4 子どもの学びを支える教師の役割	5
(1) 学びの見通しを持ち、意図的に働き掛ける	
ア 付けたい力に沿って意図的に働き掛ける	
イ 学びの過程を客観的に捉えられる手だてを講じる	
(ア) 理由を付けて認める	
(イ) 子ども同士で学び合う場を設定する	
(ウ) 学びの足跡を蓄積する	
(エ) 学びの振り返りを工夫する	
ウ 個に応じた指導を行う（支援）	
(2) 子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行う	
ア よさや可能性を見取る	
イ 付けたい力に照らして表れを見取る	
ウ 学びを継続的に見取る	
5 教師の授業づくりを支える学校体制	9
(1) 校内研修で深め、共有する	
(2) 教育課程から考える	
6 資料	11
(1) 各種調査から見る国及び静岡県の現状	
(2) 静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」	

第2部 各校種、教科等の授業実践事例	……………15
1 幼稚園	……………16
5歳児 16-18	
2 小学校	……………19
国語 19-21、社会 22-24、算数 25-27、 理科 28-30、生活 31-33、音楽 34-36、 図画工作 37-39、家庭 40-42、体育 43-45、 外国語活動 46-48、総合的な学習の時間 49-51	
3 中学校	……………52
国語 52-54、社会 55-57、数学 58-60、 理科 61-63、音楽 64-66、美術 67-69、 保健体育 70-72、技術・家庭 73-75、 外国語 76-78、特別支援学級(知的障害) 79-81	
4 高等学校	……………82
国語 82-84	
5 特別支援学校(知的障害) 中学部	……………85
作業学習 85-88	

第1部 静岡県教育

1 静岡県の教育の現状と今後求められる教育

本県では、どの子どもにも「生きる力」を育むことを目指し、子どもの学びの充実を図ってきました。

本来どの子どもにも知的好奇心や思いやりの心があり、何かができる潜在的な能力を持っているという、温かで肯定的な子ども観や、子ども個々の能力や適性に応じて、豊かな自己実現ができるように学びを支えるといった教育観は、教師用指導資料『未来をひらく子供』等を通して、本県教師に浸透してきました。

そして、子どもを学びの楽しさに導くこと（教材研究）と子どものよさを引き出すこと（子ども理解）を柱とした本県の授業づくりが進められてきました。また、問題解決的な学習等、ひと・もの・こととの関わり合いを大切にし、その中で生まれた問いを生かした授業づくりも進められてきました。

しかし、近年の各種調査結果等（P11・12 参照）から国や本県の現状を見ると、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題を苦手としていること、学力の二極化、学習意欲の低下、自尊心^{*1}の低さ等、多くの課題があることが分かります。さらに、これからの知識基盤社会においては、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく的確な判断や、学んだことを自分のものにし、自ら次の学びに向かっていく主体的な学びの姿勢が子どもたちに求められます。

こうした状況を踏まえ、教師は、「学力保障」と「成長保障」の観点から、子ども一人一人に目を向け、「どの子どもにも『確かな学力』を育む教育」を推進する必要があります。



*1 自尊心

『よりよい自分をつくっていくために』及び『よりよい自分をつくっていくためにⅡ』では、「自己肯定感」を用いてきましたが、学習指導要領では広義の「自尊心」が用いられていることから、「自尊心」で表記を統一しました。

2 静岡県が目指す教育

(1) どの子どもにも「確かな学力」を育む

「確かな学力」とは、基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力です。

そして、どの子どもにも「確かな学力」を育むとは、教師が、子どもの実態を把握した上で、どの子どもにも学習指導要領等に示された教育内容を適切に指導して評価し、次の指導に生かすことにより、上記に示した資質や能力の確実な定着を図っていくことです。

そのため教師には、子どもにとって魅力ある授業づくりを進めるとともに、その授業を通して、学習した内容が定着しているか、子どもがどう変容しているかなど、子ども一人一人に目を向け、その成長を見届けることが求められます。

そこで本県では、どの子どもにも「確かな学力」を育むために、子どもが「学びの実感」を積み重ねる授業を目指しています。「学びの実感」とは、「なぜだろう」「こうしたらどうだろう」「できそうだ」「分かってきた」「納得した」「自分の言葉で説明できそうだ」「もっとやってみよう」といった、学びの過程でわき上がってくる手ごたえのことです。

学びの過程において、一人一人の「学びの実感」を大切にすることが、子どもの主体的な学びの姿勢を高め、どの子どもにも「確かな学力」を育むことにつながります。そして、そのことを通して自尊心も高まっていきます。

(2) イメージ図について

イメージ図の上側は、「『学びの実感』を積み重ねる子どもの姿」です。「生きる力」の「知」の側面（「確かな学力」の育成）から子どもが成長していく姿を示しています。

子どもが「学びの実感」を積み重ねることで、学力の三つの要素^{*2}が相乗的に高まり、「確かな学力」が育まれるとともに、子どもの主体的な学びの姿勢や自尊心が高まっていきます。そして、目標とするよりよい自分の姿を、静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」(P13参照)で示した「有徳の人」としました。

下側は、「子どもの学びを支える教師の役割」と「教師の授業づくりを支える学校体制」を示しています。

*2 学力の三つの要素

学校教育法第30条2項「前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」の文言を基本とし、文部科学省パンフレット「生きる力」(平成22年作成)の表記等を踏まえ、本冊子では、「基礎的・基本的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学ぶ意欲」と表記している。

有徳の人

豊かな心

生きる力

健やかな体

確かな学力

学ぶ意欲

基礎的・基本的な
知識・技能

思考力・判断力・
表現力等

主体的な学びの姿勢

自尊

感情

「学びの実感」を積み重ねる授業

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育む

子どもの学びを支える教師の役割

学びの見通しを持ち、
意図的に働き掛ける

- 付けたい力に沿って意図的に働き掛ける
- 学びの過程を客観的に捉えられる手だてを講じる
- 個に応じた指導を行う（支援）

子どもを丁寧に見取り、
指導に生かす評価を行う

- よさや可能性を見取る
- 付けたい力に照らして表れを見取る
- 学びを継続的に見取る

指導と
評価の
一体化

「教材研究」と「子ども理解」

教師の授業づくりを支える学校体制

校内研修で深め、共有する

- ・付けたい力に照らして子どもの姿で語る
- ・研修方法を工夫する

教育課程から考える

- ・PDC Aサイクルを機能させる
- ・多様な資料や客観的なデータから検証する
- ・教育活動の重点化を図る

した。

「子どもの学びを支える教師の役割」では、教師が、教材研究と子ども理解に基づき「学びの見通しを持ち、意図的に働き掛ける」ことと「子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行う」ことを繰り返し行い、「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育てていくことを示しています。

「教師の授業づくりを支える学校体制」では、学校が「校内研修で深め、共有する」ことと「教育課程から考える」ことを通して、学校体制を確立し、学校全体の指導力を高めていくことを示しています。

3 「学びの実感」を積み重ねる子どもの姿

子どもは、本来知的好奇心が旺盛ですから、学びを実感すれば「もっと知りたい」「自ら解決したい」といった思いを持つようになります。

ここでは、子どもが「学びの実感」を積み重ねることについて、「確かな学力」（学力の三つの要素）や主体的な学びの姿勢、自尊感情との関係から説明します。

(1) 「学びの実感」を積み重ねる

「なぜだろう」「こうしたらどうだろう」「できそうだ」「分かってきた」「納得した」「自分の言葉で説明できそうだ」「もっとやってみたい」といった「学びの実感」を積み重ねることで、学びが充実していきます。それにより学力の三つの要素である、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等や学ぶ意欲は相乗的に高まり、主体的な学びの姿勢につながるとともに「確かな学力」が育まれていきます。



主体的な学びの姿勢とは、学力の三つの要素が相まって培われていく生涯に渡って自ら学び続けようとする思いや態度です。

(2) 「学びの実感」を積み重ねることと自尊感情

「学びの実感」を積み重ねることによって、子どもは自分の思いや考えに対して徐々に自信を深めていき、自尊感情が育まれます。そして、人との関わり合いを通して高まっていきます。

「〇〇さんの考えは□□□だから大切だね」と教師が適切な理由を付けて認めたり、学び合いの中で、「私も〇〇さんの考え方で気付いたんだけど……」と友達と共感し合ったりすることで、自分だけでは気付かなかった自分のよさや成長の可能性に気付くことができます。自分のよさや成長の可能性を自覚できることは、自尊感情を高める上で重要な要素となります。

また、「学びの実感」を積み重ねる過程において、子どもは、「思うようにいかなかった」「上手にできなかった」といった思いを持つこともあります。こうした思いを持つことは、改めて今の自分を見つめ、自分を理解するきっかけとなります。

ただし、「どうせ私には無理だ」と、うまくいかない自分を素直に受け入れられないときもあるので、そのときには、寄り添ってくれる教師の存在や的確な支援、思いを共有してくれる仲間が存在が欠かせません。

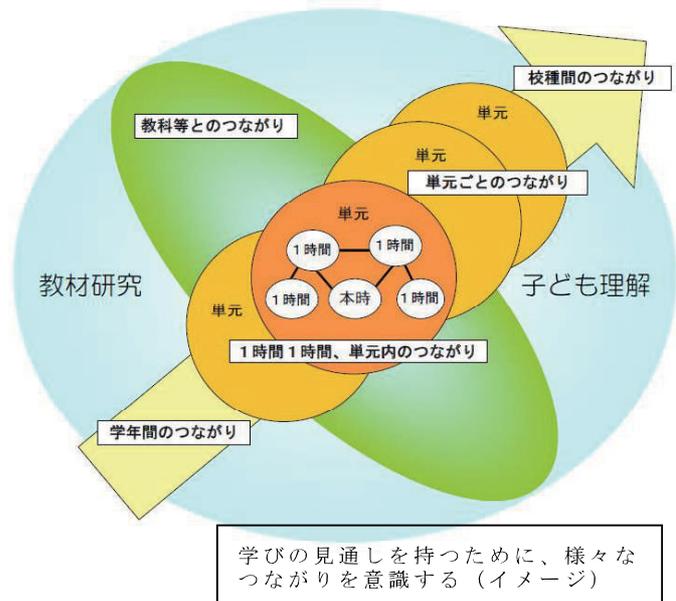
自尊感情とは、自分のよさや成長の可能性を自覚して肯定するといった捉え方に加え、課題も含めた自分と向き合い、その上で、自分をかけがえのない価値ある存在だと感じることです。

4 子どもの学びを支える教師の役割

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育むために、教師は、教材研究と子ども理解に基づき、「学びの見通しを持ち、意図的に働き掛けること」、「子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行うこと」を繰り返す必要があります。

(1) 学びの見通しを持ち、意図的に働き掛ける

教師が、深い教材研究に基づいて、学習内容の系統性、既習事項と本時の関連性を考える上で、単元、学年、校種、教科等の様々なつながりを踏まえていると、子どもの学びに対して見通しを持つことができます。そうすることにより、適切な年間指導計画や授業構想等を考え、子どもに対して意図的に働き掛けることができます。



ア 付けたい力に沿って意図的に働き掛ける

付けたい力^{*3}に沿って意図的に働き掛けるためには、付けたい力を身に付けた子どもの姿を具体的にイメージしておく必要があります。

その上で、子どもが今までの学習や生活体験の中で身に付けてきた知識・技能等を踏まえ、今、どのような資料を提示し、どのよう

*3 付けたい力

単元（題材等）又は本時の目標を指す。

な体験をさせ、どのような発問をすればイメージした子どもの姿に近づけることができるかを考えて働き掛けます。

なお、授業を計画するに当たっては、常に学習指導要領に基づいて付けたい力を設定するとともに、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することが大切です。

イ 学びの過程を客観的に捉えられる手だてを講じる

子どもが「学びの実感」を積み重ねるためには、学びの過程が充実していることを子どもが客観的に捉えられることが大切です。そのため教師は、体験的・問題解決的な学習や自主的、自発的な学習を促進するとともに、「理由を付けて認める」「子ども同士で学び合う場を設定する」「学びの足跡を蓄積する」「学びの振り返りを工夫する」といった手だてを講じる必要があります。

(ア) 理由を付けて認める

教師が子どもの学習過程を見取り、適切に理由を付けて認めていくことで、子どもは自分の変容に気付いたり、よさを自覚したりできるようになります。

(イ) 子ども同士で学び合う場を設定する

一人では気付かなかった新しい視点に気付いたり、質問に対して根拠を明らかにしたり、筋道立てて説明する必要性を生み出したりするような子ども同士で学び合う場を設定することが大切です。そうすることで、子どもは一層論理的、合理的に自分の考えを進めたり、より簡潔で、的確な表現にしたり、新たな事柄に気付いたりすることができるようになります。



(ウ) 学びの足跡を蓄積する

単元の目標に照らし、何を蓄積させるのかを明らかにした上で、ノートにまとめさせるなど、学びの足跡を蓄積させることが大切です。そうすることで、子どもは、そのときの思考や学んだことを確認したり、整理したり、以前と比較したりできるので、自分の学びを客観的に捉えることができます。

(エ) 学びの振り返りを工夫する

1時間の授業の終わりには、学びの振り返りを行います。その際、今日の学習で大切なことは何だったかを子どもに意識させたり、確認させたりできるよう、学びの振り返りを工夫することが大切です。そうすることで、子どもは基礎的・基本的な知識・技

能、思考力・判断力・表現力等が身に付いてきたことを自覚できます。

また、何時間かかけて蓄積した学びの足跡を再構成するといった単元を通した振り返りも必要です。

ウ 個に応じた指導を行う（支援）

教師は、付けたい力に沿って意図的な働き掛けを行います。そして、その働き掛けによって、子どもが、どの程度付けたい力を身に付けたのか、授業におけるそれぞれの場面で、丁寧に見取り、個々の実態に応じた指導を行う必要があります。

例えば、問いを共有する場面で、どの子どもも問いを自らのものに見ているかを見取り、共有できていない子どもがいれば、全体指導の手だてを変えたり、特定の子どもに対して別の手だてを講じたりすることです。子どもに発言の根拠を尋ねるなど、補助的な発問を投げ掛けたり、問い返したりすることは、その子どもの思考を整理させるとともに、問いを焦点化させることにもなります。

また、個別に活動するような場面では、子どもの理解状況等に応じて、ある子どもには補充、ある子どもには深化、ある子どもには発展といった指導が必要です。



(2) 子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行う

学校においては、計画、実践、評価という一連の活動を繰り返しながら、子どものよりよい成長を目指した指導を展開します。指導と評価は別々のものではなく、評価の結果によって後の指導方法を改善したり、個に応じた指導を行ったりするため、常に「指導と評価の一体化」が求められます。

「指導と評価の一体化」を進めるに当たっては、子どもを丁寧に見取ることが重要となります。本来、見取りは観察や把握をするだけでなく、指導に生かす評価を含めたものです。しかし、観察や把握はしていても、適切な評価まで行えず、見取りが次の指導に十分反映されていないことがあります。丁寧に見取り、指導に生かす評価まで行うことが指導の質を高めることにつながります。また、丁寧な見取りによって得た個々の評価を、日常的な声掛け等を通して子どもと共有することで、子どもに「学びの実感」の積み重ねを意識させることができます。

子どもを丁寧に見取ることについては、「よさや可能性を見取る」「付けたい力に照らして表れを見取る」「学びを継続的に見取る」という三点に着目します。

ア よさや可能性を見取る

目の前の子どもを他の子どもと比べず、まずはその子どものありのままの姿を見つめ、その子どもが持っているよさや成長の可能性を見取りましょう。

教師が、子どものよさや成長の可能性を見取り、共感的な価値付けを意識し、そのことを実践し続ければ、子どもは教師に対して安心感を持つようになります。そして、その安心感は徐々に学級全体に広がり、伸びやかに活動するようになります。

イ 付けたい力に照らして表れを見取る

付けたい力が身に付いた子どもの姿や授業後の子どもの姿を具体的にイメージした上で、一人一人の子どもの表れを見取りましょう。

付けたい力に照らして子どもの表れを見取ることにより、教師は、子どもの姿を通して指導を振り返ることができます。そして、子どもの姿が目標に迫っていない場合は、学級全体にどのような働き掛けをすればよいのか、一人一人の子どもにどのような支援をすればよいのかなど、具体的な手だてを考えることができます。

ウ 学びを継続的に見取る

子どもの学びを一場面だけで捉えるのではなく、子どもが変化したり、成長したりしていく過程を継続的に見取りましょう。

一人一人の子どもの歩みは、必ずしも一定ではありません。歩みの速度も内容も異なります。子どもの学びの一場面を「点」として捉えるだけでは気付かないことも、「線」として継続的に見取することで、わずかな変化にも気付くことができます。また、学習状況はもちろん、日頃の生活の様子等、その子どもの背景を踏まえた上で見取りを行えば、子どもの言動や表情に込められた思いや意味等も理解しやすくなります。



5 教師の授業づくりを支える学校体制

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育むためには、教師一人一人が授業力の向上を図るだけでなく、学校として教師の授業づくりを支える体制をつくる必要があります。

(1) 校内研修で深め、共有する

教師の授業づくりを支える学校体制の一つが校内研修です。同僚性を生かした O J T (On the Job Training) *4 を取り入れ、教師全員が互いに指導力を向上させる校内研修体制を構築していくことが大切です。

各学校における校内研修の状況を見ると、「子どもの姿で語る」ことが根付きつつあります。本県が掲げるどの子どもにも「確かな学力」を育むという目標に迫るには、今後、「付きたい力に照らして子どもの姿で語る」ことが、どの教師にも求められます。

そのため、何をどのように見取り、どのように評価するのか、その結果を子どもへの支援や授業改善にどのようにつなげていくのかなどについて、校内研修で深め、共有する必要があります。それは、改めて子どもへの働き掛けは適切であったかを振り返ることにもつながります。

さらに自校の目指す授業像や研修仮説等を授業研究等で表れた子どもの姿から検証し、研修の成果や次への課題を校内研修で深め、共有すると、学校としての方向性が一層明確になり、教師一人一人の研修意識が高まります。

また、充実した校内研修にするためには、自校の実態に応じて校内研修の方法（進め方や形態、授業分析の方法等）を工夫することが必要です。

既に取り入れている学校もありますが、例えば、どの教師も発言しやすくなるよう小グループで検討会を行ったり、成果や課題を可視化できるように付箋を使って類型化したりするといった方法があります。また、教師同士のつながりを深めたり、教材の価値やその授業の目標、課題等を共有しやすくしたりするために、一つの単元を学年部内でリレー式に研究授業を行う方法もあります。

研修については、様々な手法が考えられますが、常に目的を明確にして取り組むことが大切です。

*4 O J T (On the Job Training)

企業等における能力開発技法の一つで、「日常的な業務を通して、必要な知識や技能、意欲、態度等を意図的、計画的に高めていく取組」のことをいいます。

これを、学校での研修に置き換えると、「日常の実践の中で、授業力や研修に臨む意識・姿勢等を高めるとともに、校内研修と自己研修をつなぐよう、教職員が専門的な分野や得意な分野で互いに力を発揮しながら継続的に研修に取り組むこと」ということができます。

(2) 教育課程から考える

学校の教育活動を教育課程から考え、教育活動全体から改善を図っていくことも、教師の授業づくりを支える学校体制の一つです。

教育課程から考える場合、自校の教育活動を子どもの姿から適切に評価し、それを確実に改善方策につなげるといったP D C Aサイクルを機能させることが重要です。

適切に評価するためには、学校評価アンケート（子ども・保護者・教師・地域等）や全国学力・学習状況調査等、多様な資料や客観的なデータを用いて検証することが大切です。全国学力・学習状況調査は、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等や学ぶ意欲の一部についても客観的な数値データを得ることができる貴重な資料の一つです。

また、評価に基づいて教育課程を見直すに当たっては、教育活動の重点化を図ることが大切です。例えば、地域・家庭、外部人材等の「横の連携」から子どもへの学習支援を手厚くしたり、保、幼、小、中、高校の「縦の接続」から発達の段階を踏まえて教育活動を精選し系統化を図ったりすることなどです。

こうした考えに基づき、校内研修や教育課程から教師の授業づくりを支える学校体制を確立させることによって、教師が異動してもその学校としての指導力や特色ある教育を維持・向上させ、子どもに「確かな学力」を育むことができます。

各学校においては、子どもの実態や学校・地域等の状況を踏まえた上で、P D C Aサイクルに基づき、自校の子どもにとって効果のある取組を実践してください。



6 資料

(1) 各種調査から見る国及び静岡県の現状

1 国の現状

(1) OECD生徒の学習到達度調査（PISA2009）より

- ・読解力を中心に我が国の生徒の学力は改善傾向にあるが、トップレベルの国々と比べると下位層が多い。
- ・読解力については、必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意だがそれらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手である。
- ・生活において数学的根拠に基づき判断を行い、数学に携わる能力といったいわゆる数学的リテラシーについては、OECD平均を上回っているが、トップレベルの国々とは差がある。

* PISA調査における読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」と定義されており、従来、日本で用いられてきた「読解力」だけに留まるものではない。

(2) IEA国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2007）より

- ・勉強が楽しいと思う割合は、前回調査と比べ、小学生では増加傾向が見られ、特に理科で国際平均を上回ったが、中学生は国際的に見て数学・理科ともに依然低い。
- ・依然として宿題をする時間が短く、テレビやビデオを見る時間が長い。

(3) 全国学力・学習状況調査より

学習に対する関心・意欲・態度、読書・学習時間、基本的な生活習慣、自尊感情・規範意識等の項目で、肯定的な回答又はその時間が長いと回答した小中学生ほど、学力が高いという傾向が確認された。

2 静岡県の現状（全国学力・学習状況調査結果及び第三者機関提言による）

- ##### (1) 小学校調査においては、知識に関する問題（A問題）、活用に関する問題（B問題）ともに年度ごとの平均正答率（％）の変動が大きく、全体的に低下傾向が見られる。

小学校	H19平均正答率			H20平均正答率			H21平均正答率			H22平均正答率			H24平均正答率		
	静岡県	全国	差	静岡県	全国	差	静岡県	全国	差	静岡県	全国	差	静岡県	全国	差
国語A	82.8	81.7	1.1	65.6	65.4	0.2	70.8	69.9	0.9	82.5	83.3	-0.8	80.4	81.6	-1.2
国語B	65.0	62.0	3.0	52.1	50.5	1.6	49.2	50.5	-1.3	78.4	77.8	0.6	54.1	55.6	-1.5
算数A	82.6	82.1	0.5	72.0	72.2	-0.2	79.3	78.7	0.6	73.2	74.2	-1.0	72.1	73.3	-1.2
算数B	63.6	63.6	0.0	51.4	51.6	-0.2	54.1	54.8	-0.7	48.4	49.3	-0.9	57.6	58.9	-1.3
										理科			58.1	60.9	-2.8

中学校	H19平均正答率			H20平均正答率			H21平均正答率			H22平均正答率			H24平均正答率		
	静岡県	全国	差												
国語A	83.0	81.6	1.4	75.4	73.6	1.8	79.2	77.0	2.2	76.6	75.1	1.5	76.1	75.1	1.0
国語B	76.0	72.0	4.0	64.1	60.8	3.3	77.3	74.5	2.8	67.7	65.3	2.4	64.0	63.3	0.7
数学A	75.6	71.9	3.7	67.0	63.1	3.9	65.8	62.7	3.1	67.2	64.6	2.6	65.3	62.1	3.2
数学B	63.5	60.6	2.9	52.7	49.2	3.5	60.7	56.9	3.8	46.5	43.3	3.2	52.7	49.3	3.4
										理科			53.2	51.0	2.2

(2) 児童生徒質問紙の学力に直結した項目に課題が見られる。特に「国語の勉強は好き」「国語の授業の内容はよく分かる」など、国語に関する項目が全国平均と比較して低い。

(肯定的な回答の割合%、上段:本県、下段:全国)

質問事項 〔 〕は生徒質問紙の文言	小 学 校					中 学 校				
	H19	H20	H21	H22	H24	H19	H20	H21	H22	H24
国語の勉強は好きですか	55.4	51.2	53.3	57.6	53.4	59.0	58.0	57.4	57.3	58.1
	59.6	56.1	58.3	62.1	63.0	56.8	55.2	56.7	57.2	58.6
国語の勉強は大切だと思いますか	90.8	89.1	89.3	91.2	91.8	90.8	87.3	87.1	89.5	89.6
	91.1	89.4	90.3	91.6	92.6	89.9	87.3	87.6	89.0	90.3
国語の授業の内容はよく分かりますか	77.2	77.0	78.3	80.9	78.1	67.9	70.2	70.0	72.0	71.7
	78.0	78.0	80.0	82.3	83.1	65.4	66.8	68.8	69.9	71.2
算数〔数学〕の勉強は好きですか	67.1	67.9	68.3	65.4	66.2	52.9	53.4	55.1	55.9	54.7
	65.0	65.4	66.2	63.8	64.9	51.0	52.8	52.5	53.3	52.1
算数〔数学〕の勉強は大切だと思いますか	93.0	92.2	92.0	91.9	93.2	80.2	78.3	78.1	80.5	83.1
	92.5	91.7	91.9	92.1	93.0	78.8	78.1	77.5	79.3	82.1
算数〔数学〕の授業の内容はよく分かりますか	78.2	79.7	80.0	77.6	78.3	65.9	66.2	66.6	68.7	67.1
	77.1	78.4	79.2	78.0	79.1	63.6	65.5	64.9	65.7	64.9

(3) 全国的な分析から自尊感情が高い児童生徒は、平均正答率が高い傾向が見られる。本県において「自分にはよいところがあると思う」と肯定的な回答（当てはまる、又はどちらかといえば当てはまる）をした小学生は79%、中学生は72%であるが、「当てはまる」と回答した小学生は3割、中学生は2割にとどまっている。

(当てはまると回答した割合%、上段:本県、下段:全国)

質問事項	小 学 校					中 学 校				
	H19	H20	H21	H22	H24	H19	H20	H21	H22	H24
自分には、よいところがあると思いますか	74.7	77.1	78.2	77.4	79.0	63.2	64.3	65.0	67.5	71.9
	71.5	73.4	74.6	74.4	76.8	60.5	60.8	61.2	63.1	68.2

(4) 平成21年度調査（悉皆調査）によると、授業研究を伴う校内研修を昨年度7回以上実施した学校の割合は、小学校76.5%、中学校49.6%で、全国平均を12～14ポイント上回っており、この点から見ると教師の研修への意識は高いことがうかがえる。一方、学校の指導計画や取組を検討するにあたり、平成20年度全国学力・学習状況調査の調査結果や報告書の内容を参考にした学校の割合は、小学校79.5%、中学校72.6%で、全国平均を5～8ポイント下回っており、全ての学校において客観的なデータ等を活用したPDCAサイクルが確立されているとは言えない状況にある。

(2) 静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」

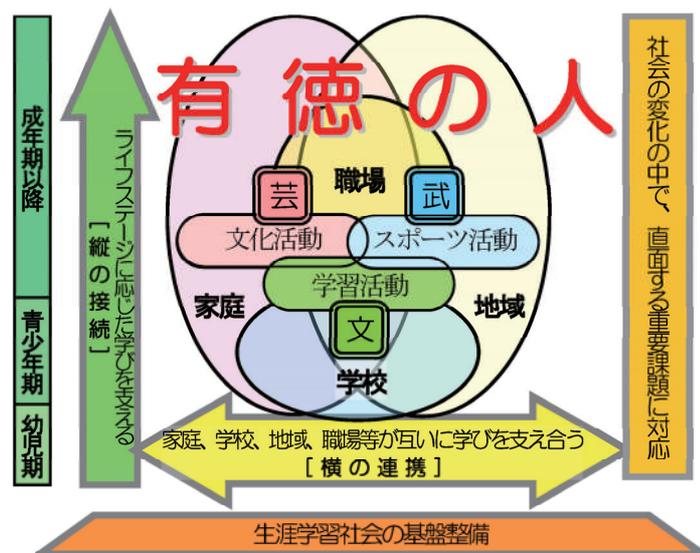
平成23年3月、静岡県・静岡県教育委員会では、静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」を策定しました。

本プランは、平成23年度からおおむね10年先を見通した本県教育の目指すべき姿を示しており、「有徳の人」の育成を基本目標としています。

－「有徳の人」とは－

- ① 自らの資質・能力を伸長し、個人として自立した人
- ② 多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にする人
- ③ 社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人

生涯学習の考え方の下、子どもから大人まで、人生のそれぞれの段階に応じた学びの場の充実を図る「縦の接続」と、家庭、学校、地域や職場等の「横の連携」を推進することを施策展開の基本的な考え方として、「有徳の人」の育成を進めています。



学校教育を中心とした学びの場においては、生涯学習社会に生きる人づくりの基盤となる「確かな学力」の向上と一人一人の資質・能力の伸長を図るとともに、「豊かな心」と「健やかな体」を育むことが必要です。

特に、「確かな学力」の育成に当たっては、

- 小・中・高を見通した指導の充実を図るとともに、教員の授業力向上に向けた取組を推進すること
 - 学習指導要領を踏まえた魅力ある授業づくりを一層推進すること 等
- を示しています。

